



**Data**

プロデューサー: アン・ホイ、ジュリア・チュー  
監督・脚本: ヘイワード・マック  
原作: 『我的愛如此麻辣 (私の愛はこんなにスパイシー)』 エイミー・チャン  
出演: サミー・チェン/メーガン・ライ/リー・シャオフォン/リウ・ルイチー/ウー・イエーション/リッチー・レン/ケニー・ビー/アンディ・ラウ

## 👁️👁️ みどころ

あなたは「重慶火鍋」、「四川火鍋」を知ってる? また、「花椒の味 (麻辣味)」を知ってる? また、「宋家の三姉妹」ならぬ、香港、台湾、重慶に住む「夏家の三姉妹」を知ってる?

冒頭は、香港島・大坑のファイヤードラゴンダンス (舞火龍) のお祭りに注目! このオヤジ、火鍋店「一家火鍋」を1人で切り回す働き者だが、香港、台湾、重慶を股に掛けた「女遍歴」は如何に? その急死を受けて葬儀の席で初対面した「夏家の三姉妹」の困惑ぶりとは?

宋家の三姉妹は結婚相手がとてつもない男だったこともあり、激動する時代の中でそれぞれ数奇な歴史上の役割を果たしたが、夏家の三姉妹の葛藤と再生は如何に?

—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*—————\*

### ■□■花椒とは? 麻辣とは? 火鍋とは? 原作は? ■□■

本作をしっかり味わうためには、①花椒、②麻辣、そして③火鍋という3つの中国語のキーワードを理解する必要がある。「花椒」とは、中華料理、とりわけ四川料理に欠かせないスパイスで、花椒を使った料理の代表は、麻婆豆腐と担担麺だ。中国語では、花椒の痺れるような辛さを「麻 (マー)」と表現し、唐辛子のピリッとした辛さを「辣 (ラー)」と表現するが、そのハーモニーである“麻辣味”を作り出すのに、花椒は欠かせない。

日本のスパイスでは、「山椒は小粒でもびりりと辛い」の表現でよく使われる「山椒」が有名。しかし、「花椒」は中国原産の「カホクザンショウ」の果皮を乾燥させたものであるのに対し、山椒は日本原産の「サンショウ」の果皮だから、同じミカン科サンショウ属でも、別の種らしい。また、「火鍋」は日本でも“中国風しゃぶしゃぶ”として親しまれているが、その本場は「重慶火鍋」、「四川火鍋」だ。

他方、香港の有名な女性監督、プロデューサー、脚本家で、1970年代から80年代にかけて、香港新浪潮（香港ニューウェーブ）の代表的な存在として活躍してきたアン・ホイ（許鞍華）氏が、ヘイワード・マック（麥曦茵）監督を起用して映画化を目指したのは、エイミー・チャン（張小嫻）の小説『我的愛如此麻辣（私の愛はこんなにスパイシー）』。これは、手紙の形式で進む書簡体小説らしい。本作のストーリーと人物像はそんな原作と全く同じではないが、主たる舞台を香港島の火坑にある火鍋店・「一家火鍋」店とし、3人の異母姉妹が登場する基本ストーリーは原作と同じだ。三姉妹や四姉妹の物語には名作がたくさんあるが、さて、本作の三姉妹は？

## ■□■「宋家の三姉妹」は有名。「夏（シア）家の三姉妹」は？■□■

四人姉妹の物語は、アメリカならルーザ・メイ・オルコットの『若草物語』、日本なら谷崎潤一郎の『細雪』が有名。また、三姉妹の物語なら、ロシアにチェーホフの『三人姉妹』があれば、中国には『宋家の三姉妹』がある。私は2000年に『宋家の三姉妹』（98年）（『シネマ1』59頁）を観たが、父親・宋嘉澍を姜文（チャン・ウェン）が演じ、長女・霏齡を楊紫瓊（ミシエル・ヨー）が、次女・慶齡を張曼玉（マギー・チャン）が、三女・美齡を鄔君梅（ヴィヴィアン・ウー）が演じた壮大な歴史物語は、超一流の作品だった。この三姉妹が中国と台湾、そしてアメリカで現実にも果たした役割は大きい。「宋家の三姉妹」は、「富を愛した」長女・霏齡、「国を愛した」次女・慶齡、「権力を愛した」三女・美齡だったが、本作に見る「夏（シア）家の三姉妹」は？

本作では冒頭、本作の主人公になる長女ハー・ユースュー（夏如樹）（サミー・チェン（鄭秀文））の父親で、「一家火鍋」の店主であるハー・リオン（夏亮）（ケニー・ビー（鍾鎮濤））が、香港島・火坑のファイヤードラゴンダンス（舞火龍）のお祭りで活躍する姿を見せた後、突然、彼の葬儀のシークエンスになる。リオンの急死を受けて、ユースューは戸惑いの中で、にわか仕立ての葬儀を行わざるを得なくなったが、仏教徒であるリオンの葬儀を道教の流儀で行ったのは、いくら父娘間の交流がなかったとはいえ、失笑ものだ。それはともかく、この葬儀の席でユースューは、台湾の台北から駆けつけてきた次女のオウヤン・ルージー（歐陽如枝）（メーガン・ライ（賴雅妍））、中国の重慶から駆けつけてきた三女のシア・ルグオ（夏如果）（リー・シャオフォン（李曉峰））とはじめて出会うことに。

## ■□■この父親と長女との関係は？なぜ台湾と重慶にも娘が？■□■

アンソニー・ホプキンスが第93回アカデミー賞主演男優賞を受賞した『ファーザー』（200年）は、2人の娘（？）との微妙な関係の中で、認知症が進行していく父親の苦悩が見事に描かれていた。それに対して、本作のリオンは、身を固めた香港で「一家火鍋」を営み、長女ユースューをもうけながら、台湾では初恋の人（？）ジャン・ヤーリン（張雅玲）（リウ・ルイチー（劉瑞琪））との間に次女ルージーをもうけたばかりか、重慶では離婚した妻との間に三女のルグオをもうけているのだから、その“女遍歴”は華麗なものだ。もちろん、本作ではそれを時系列に沿って説明してくれないから、アトランダムに登場し

てくるスクリーン上のさまざまなエピソードから、1人1人の観客が全体像を繋いでいかなければならない。それはそれで大変だが、同時に、それが本作を鑑賞する醍醐味だ。

三人姉妹が主人公になる映画では、三人三様の顔立ちや容姿、そしてファッションが大きなポイントになる。「宋家の三姉妹」は前述のような違いが明確だったが、衣装デザインで三者三様の個性を際立たせている本作では、①ロングの黒髪とメガネという次女ルージーは、「夢を諦めて堅実な生活をしろ」と煩わしい母ヤーリンといつも不仲だったが、ある日、そんなヤーリンと大喧嘩したルージーは、香港へ赴くことに。また、母親がリオンと離婚した後、大好きな祖母のリウ・ファン（劉芳）と2人で仲良く暮らしていた三女ルーグオは、「私のことはいいから、早く結婚しろ」とうるさい祖母を離れて香港へ赴くことに。

そんな思惑（？）が、たまたま「一家火鍋」の継続で一致した3人姉妹は、今、何とか父親秘伝の味を再現しようと奮闘を始めたが・・・。

### ■□■ユーシューの父親像、父親観は？その変化は？転換は？■□■

香港は中国と比べるまでもなく狭く小さいから、香港島の犬吠でリオンが経営している「一家火鍋」店とユーシューが住んでいる九龍半島の部屋は、海を隔てて向かい合っているだけで、距離的にはごく近い。また、九龍半島と香港島は海底トンネルでつながっているが、交通機関の関係で海を越えるのは簡単ではないらしい。「一家火鍋」のオーナーであるリオンは、秘伝のレシピを一人で工夫してひねり出したばかりではなく、店の経理面も仕入れ面も、更に客へのサービス面も一人でこなし、八面六臂の奮闘を続けていたらしい。それはそれでいいのだが、あまりに忙しいため娘の面倒に時間を割くことができないリオンは、どうしていたの？そんな父親と子供時代から娘時代までずっと接してきた長女ユーシューの父親像、父親観は？

リオンとユーシューは今、父娘2人だけの家族なのに、なぜ九龍半島と香港島に別居しているの？ユーシューの回想シーンの1つとして、せっかく招待してくれた「一家火鍋」店の食卓に座っているのに、リオンはお客さんの注文に応じたり挨拶したりするのに忙しく、全然ユーシューに構う時間がない。そのため、ある瞬間にユーシューがブチギレしてしまう姿が登場するが、ここにすべてリオンとユーシューの父娘関係が象徴されている。そのため、ユーシューが大人になってからはずっとこの父娘の仲は悪く、父娘関係は疎遠になったが、あらためて三人姉妹が一致協力して父親の味を再現しようとしている今、ユーシューの心の中に生まれてきた新たな父親像、父親観は？その変化は？転換は？

### ■□■ユーシューの異母姉妹観は？大喧嘩が勃発？いやいや！■□■

父親の死亡・葬儀が突然のことなら、2人の異母姉妹との初対面も突然のこと。ユーシューの父親像、父親観は前述のとおりだから、遠く離れた台湾や重慶で、自分の母親とは違う女の間で生まれた2人の異母姉妹をユーシューが許せなかったのは当然だ。すると、父親の葬儀は穏便に済ませたものの、その後はひょっとして3人の異母姉妹による大喧嘩

が勃発？そう思っていたが、いやいや！事態は全く違う展開に？それは一体なぜ？

3人の異母姉妹の母親としてスクリーン上に登場してくるのは、次女ルージーの母親ヤーリンだけ。三姉妹それぞれの母親と急死した父親との関係は、三姉妹相互間の会話の中で小出しにされるだけだから、それは注意深く拾っていく必要がある。ルージーの母親ヤーリンが今でもそれなりに美人なのは、彼女がリヨンの初恋の人だったためらしい（？）が、リオンはいかにして香港と台湾という2つの舞台で華麗なる女性関係（？）を展開していたの？

茶化して言えば、そんな風にもなるのだが、スクリーン上で見る実際の異母姉妹間の会話はもちろん真剣そのもの。それを聞いていれば、リオンがいかに誠実に生きてきたかがわかるし、「一家火鍋」における彼のお客様本位で、勤勉そのものの仕事ぶりにも納得できる。さらに、母親不在で、自分の仕事が忙しい中で幼いユーシューを育てていた時代のリヨンの細かい娘への思いやりや努力もよく理解できる。しかし、リオンと2人で暮らしていた子供時代のユーシューにはそれが理解できなかったし、大人になってからも、忙しいばかりの父親と距離をとっていたのは仕方ない。しかし、リオン亡き後、それまでその存在すら認めていなかった2人の異母姉妹と互いの境遇を語り合う中で、新たな父親像、父親観が生まれてくると、同時に喧嘩相手としてではない異母姉妹観も形成されてくることに・・・。

そんな中、たまたまルージーとルグオがそれぞれの事情によって香港にやってくることになったうえ、3人の異母姉妹が相協力して「一家火鍋」の売り物であるリオン秘伝のスープを作り出し始めると・・・？

## ■□■ユーシューを巡る2人の男たちは？仕事は？人生は？■□■

「宋家の三姉妹」の長女・霽齡は銀行家の孔祥熙と結婚したが、次女・慶齡は孫文と結婚。そして、三女・美齡は蒋介石と結婚した。そのため、孫文の死亡後、その意志を継いで国民党のリーダーになった蒋介石の妻・美齡と、こちらも孫文の意志を継いで共産党シンパになった慶齡との対立が、その後深まっていった。このように、「宋家の三姉妹」は、夫の関係で三者三様の対比が際立っていたが、「夏（シア）家の三姉妹」は？

そう考えながらスクリーンを見ていると、三女ルグオは典型的なおばあちゃんっ子であるうえ、まだ若く、仕事一筋だから、男への関心はないらしい。次女のルージーもビリヤードの選手として挫折したこと（？）が大きな心の傷になっていたから、男どころではないらしい。それに対して、長女のユーシューは、元婚約者だったというクオック・ティンヤン（郭天恩）（アンディ・ラウ（劉德華））が今でも優しく付き添ってくれている上、父親の知り合いだった麻醉医のチョイ・ホーサン（蔡浩山）（リッチー・レン（任賢齊））が父親の死亡後少しずつ存在感を増していくことに。つまり、ユーシューにとっては父親の突然の死亡は大きな喪失であったと同時に、「一家火鍋」の見直しと、新たな男関係の構築という意味で新たな出発点になったわけだ。

ユーシューが「一家火鍋」における父親秘伝の「花椒の味（麻辣味）」の再現に奮闘してく中ではじめて出会った異母姉妹のルージーとルーグオと互いに打ち解け、心を開いていくストーリーが本作の肝だが、ユーシューを巡って特別出演（友情出演）した2人の男たちについても、サブストーリー的にそのほのぼのとした展開を味わいたい。

## ■□■三人姉妹の今後は？「一家火鍋」の存続は？■□■

前述したように、「宋家の三姉妹」はそれぞれどんな男と結婚したかによってそれぞれの生き方が大きく変わっていったが、子供時代の「宋家の三姉妹」は聡明で裕福な父・宋嘉澍の下で何不自由なく仲良く育っていた。それに対して「夏（シア）家の三姉妹」は、異母姉妹であるだけでなく、香港、台湾、重慶と住むところも全然違っていたうえ、父親の葬儀まで一度も会ったことがなかったのだから、今は一時的に「一家火鍋」で「花椒の味（麻辣味）」を再現するべく一致協力していても、それがいつまでも続くわけではない。何よりも、ユーシューはホーサンから「イギリスに来ないか（結婚しないか）」と言われていたし、重慶に戻ったルーグオには残り人生の少ない祖母との貴重な時間が残っているはずだ。また、母親との関係はうまくいっていなかったルージーも、香港行きは長期計画に沿ったものではなく、あくまで彼女の本拠地は台湾だ。したがって、「一家火鍋」の秘伝の味が再現でき、かつてのお客様が戻ってきたとしても、三人姉妹が協力して店の経営に当たることは不可能だ。もっとも、今の三人姉妹の互いを分かり合えた姿はその奮闘を通じて形成されたものだから、もし葬儀後、すぐに店を手放していれば・・・？

また、同じ台湾でも、母親のヤーリンは山にあるヴィラに暮らし、自分は繁華街に借りたアパートで暮らすことに象徴されるように、母親との仲が険悪だったルージーにとって、香港に行くことはそれなりの決断だったが、それから得られたものは？それと同じように、あえて大好きな祖母の元を離れて香港までやってきた三女ルーグオにとって今、重慶に戻っていくことの意味は？3人の奮闘の甲斐あって、「一家火鍋」の「花椒の味（麻辣味）」は再現でき、客足も戻ったようだが、さて、今後の店の経営は如何に？長女のユーシューは父親の跡を継いで「一家火鍋」の2代目店主になるの？それとも・・・？

2021（令和3）年9月13日記

# 『日本と中国』2258 (2021年11月1日)



花椒 (ホアジャオ) の味

11月5日(金)より新宿武蔵野館他全国映画公開

©2019 Dual Century (Taiwan) Co., Ltd. Beijing Lalin Film Co., Ltd.  
 Emperor Film Production Company Limited Shanghai Yeah!  
 Media Co., Ltd. All Rights Reserved.

監督・脚本：ヘイワ  
 ト・マツク  
 出演：サミー・チェン  
 /メーガン・ラン/ライリー・  
 ジャオ/ファン/リウ・  
 ルイ/チャー/ウー・イ・  
 シン/ユー  
 製作年：2019年、香港  
 118分  
 配給：武蔵野工  
 ントメディアエンタ  
 ート株式会社  
<https://fapra.musashino-k.jp/>

香港の大病にちなみ火鍋店「一家火鍋」店まであるリヨンの発死を受け、香港に住むリヨンの長女、台港から駆けつけた次女、重慶から駆けつけた三女の異母三姉妹が、葬儀の度で初顔会わせるシーンが本作最初のハイライト。壮大な「歴史モノ」だった『宋家の三姉妹』の7年とは異なり、スクリーン上のさまさまなエピソードから全体像を築いていくのが、本作の醍醐味だ。

店の賃貸契約は残っており、解約しても遺約金が発生するため、長女は「一家火鍋」継続を決意。他方、次女は「夢を諦めて意気な生活をしる」と煩わしい母と大喧嘩して、三女は「早く結婚して」とうるさい祖母を離れて、それぞれ香港へ赴くことに。こうして異母三姉妹は、父親秘伝の「花椒の味」を再現しようと奮闘を始めることに。しかし、リヨンは秘伝のレシピ

初対面の異母三姉妹が、父親秘伝の味再現に奮闘

とを一人でひねり出したばかりではなく、経理面も仕入れ面もサービス面も一人でこなし、八面六臂の動きを続けていたらしい。あまりに忙しかったため、リヨンと長女の仲は悪く、疎遠になっていたが、三姉妹が協力し父親の味を再現しようとしていく令、長女の心の中に生まれた新たな父親像、父親親は？

他方、父親の死亡が突然のこととなり、2人の異母姉妹との初対面も突然のこと。葬儀後は異母三姉妹による大喧嘩が勃発。その愚つていたが、いやいや事態は全く違う展開に。異母姉妹間の会話は真剣そのものだ。それを聞いていれば、リヨンがいかに醜美に生きてきたかがわかるし、「一家火鍋」における彼のお客様本位の、勤勉な仕事ぶりにも納得できる。

「花椒の味」再現に奮闘する中で、異母三姉妹が互いに打ち解け、心を開いていくストーリーが本作の肝だ。奮闘の甲斐あって「花椒の味」は再現でき、客も長ったようだが、今後の店の経営は如何に？長女は父親の跡を継いで「一家火鍋」の2代目店主になる？ それとも……？

## 熱血弁護士 坂和章平 中国映画を語る(56)



映画を斬る「さくわ」を主め映画に關する記事多影。公社「日本経済新聞」NPO法人代表「吉野好雄」理事

さくわ・しちろう  
 1948年臺灣臺北出生  
 大阪大学法學部卒。都府  
 開業し興わる新法多多く手  
 がけ、日本都市計画学会  
 川員、同社に日本映画学会  
 理事兼作員、を受賞『昭和  
 的中國影史』を著す(2004年)  
 『二〇二〇のさくわ』を著す